

## ぬくもりあふれるおもてなしの国・イラン

写真・文 福島県立二本松工業高等学校 松浦 健人



2013年8月、中東の楽園・ドバイからイラン航空でペルシア湾を渡り、イランの古都・イスファハーンに到着した。イスファハーンは砂漠のど真ん中にあるオアシス都市で、16世紀に栄えたサファヴィー朝の都である。

街の中心に広がるのが、「イマーム広場」(写真①)。砂漠では貴重な水が噴水でふんだんに使われており、かつて「世界の半分」と謳われた広場は、今では世界中から観光客を受け入れていた。観光客のなかには、アフガニスタン人やシリア人、イラク人などもいて、「国情は大丈夫か？」などと心配してしまう。しかし逆に、私が「日本の福島出身である」というと、「そんな危ないところに住んでいて、お前は大丈夫か？」と心配されてしまった。どうやら世界中どこでも、外部には実情とは違った否定的な情勢だけが強調されて伝わるらしい。

イラン人はもとより、多くの穆斯林たちはひじょうに人懐っこく、次から次へと声をかけられる。また、偶像崇拜禁止の教えから当初人物撮影にはためらいがあったが、これは杞憂であった。なかには拒否する女性もいたが、基本的には老若男女問わず、写真を撮るようにせがまれることも多かった(写真②③)。

また、街歩き中に、モスクで行われていた葬式に遭遇(写真⑤)し、穆斯林でない私がイスラームの葬式に参列できたことも貴重な経験であった。モスク内は男女別に仕切られ、先導師がコーランの一節を朗読している。その一方で次から次へと飲食物が供され、ありがたくいただいた。

イスファハーンでのほかの見どころは、街南部を流れるザーヤンデ川にかかる橋である。しかし、訪れた夏季には川は干上がっ

てしまっていた(写真⑥)。

ラマダン最終日の夜は、苦行から解放された穆斯林たちのお祭りとなる。イマーム広場には街中のイラン人が家族ぐるみで押しかけ、夜のピクニックを満喫していた(写真④)。私は多くの家族から誘われ、食事の輪に加わった。夜のイマーム広場はライトアップされ、昼間とは違った美しさを放っていた。

イランの食事は、キャバブ(ケバブ)が中心で、あとは豆やちょっとした野菜などである。緩やかなイスラーム国には見受けられるアルコール類は、ついぞ見つけることはできなかった。結局、炎天下の喉の渇きを潤したのはノンアルコールビールであった。

インターネットはある程度普及しており、私もWi-Fiを使ってサイトにアクセスできたが、FacebookなどSNSにはアクセス制限があるようだった。

日本にいと、イランに関するニュースは、隣国イラクと同様ネガティブなことしか耳にしないかもしれない。しかし、それらの悪いイメージはすべてイラン自身が払拭してくれる。観光資源と旅する環境(インフラ)は十分であり、物価も安い。そして、何よりもイラン人はやさしく、無償のおもてなしで旅人の心をいやしてくれる。女性の人権が侵害されているというが、車いすの女性を男性が押している姿を見たり、男女が手をつないで歩いたり、女性の荷物を男性が持っていたり、明らかにあ天下な家庭状況を目の当たりにしたりと、傍目には日本の状況とまったく同じ男女関係がそこにはあった。これまで60か国以上を旅してきたが、私にとって日本以外の一番のお勧めの国、それはイランである。